

源氏物語補遺

▼紫式部について

○作者紫式部の名は、宮仕え中に得た呼び名と考えられる。父は藤原為時、母は藤原為信の娘。母親は早世し

たという。共に歌人・学者の流れを汲む名門の家柄であったが、父為時は地方官を歴任する受領(国守・六等官)層にとどまった。父

親は漢字者としても知られ、作者は文字的には恵まれた環境に育ったらしい。二十代も半ばを過ぎて藤原宣孝と結婚し、一女

だいにのさんみ

(大式三位)をもうけるが、二年あまりで夫は急死する。数年後に一条天皇の中宮彰子(藤原道長の長

女)のもとに出仕する。晩年の消息ははっきりしないが、宮仕えを辞した後の歌は、晩年の寂

寥とやり場のない憂悶を伺わせてあまりある。

♪ふ(降／経)ればかく憂さのみまさる世を知らず(関わることなしに)荒れたる庭につもる初

雪

♪いづくとも身をやる方の知られねば(我が身を慰める方法が分からないので)憂しと見つつ

も(思いつつも)ながらふるかな

▼源氏物語の概要

○『源氏物語』は、**一条**天皇の後宮で、女房が中宮や他の女房たちに語って聞かせるという形で、宮廷社会・貴族社

会に受け入れられていったものである。四百人を越える登場人物を配して、構想の展開に破綻もなく、かくも巨大・複雑・深遠な作品が、

先行する作品のほとんどない千年に近い昔に、中宮に仕えた一介の女房の手によって一挙に作り上げられたことは、『**無名草子**

(平安末期〜鎌倉初期の物語批評。無明抄鴨長明とは違う)』の言うように、「奇蹟」と呼ぶ以外には捉えよう

がない。

後代への影響は大きく、多くの亜流の作品を生んだ。絵巻物(院政期)の素材となり、能を初めとする演劇の分野の題材ともなっている。

なかでも、鎌倉時代にその続編として書かれた『**山路(やまじ)の露**』、原作では語られなかつ

た『**六条御息所**』と光源氏との馴れ初めの経緯の補作として書かれた『**手枕**(by **本居宣長**)』

は興味深い。

代表的な研究書に『**源氏物語湖月抄**(江戸前期。by **北村季吟**)』

『源氏物語玉の小櫛（江戸中期。〇〇本居宣長）』

『源氏物語評釈（江戸末期。〇〇萩原広道）』

がある。

どの帝の御代であったか、身分がさほどに高くなって、帝の寵愛を一身に集めた更衣があった。父**大納言**は早く亡くなっており、力強い後見のいない、心細い身の上であった。他の女御・更衣たちは、これに嫉妬・迫害し、世人も批判の目を向けたが、彼女の頼みはただ一つ、帝の愛情だけであった。帝の寵愛は、かえって彼女の立場を辛いものにした。

帝には、今ときめく**右大臣**の娘・**弘徽殿**の女御との間に既に第一皇子があったが、桐壺の更衣にも、輝くばかりの男御子とのこみこがうまれた。主人公光源氏の誕生である。更衣への様々な迫害が進む内にも御子は三歳になり、**袴着**の儀が立派に執り行われた。桐壺の更衣は、平素の病弱に加えて周囲の迫害が重なり、心労の余り早世する。御子は僅かに三歳であった。幼い御子も母の喪に服するため宮中を退出する。更衣の愛宕読み（**おたぎ**）地名での葬送で三位が遺贈される。帝は楊貴妃を失った玄宗皇帝さながら、悲嘆に明け暮れる。秋の夜長、ひとしお恋しさの募った帝は、**鞍負の命婦**（**ゆげいのみょうぶ**）を更衣の里に遣わしたりする。命婦は、更衣の母と懐旧

の涙に暮れ、形見の品として装束と御髪^{みづし}上げの品とを頂いて宮中に帰る。翌年の春、第一皇子の**立坊**（皇太子になること）が決定される。悲嘆にくれる祖母は他界し、六歳の御子は頼るべきものがない境涯となる。

御子は父帝のもとで、七歳で読書始め（読み..**ふみはじめ**）をする。才芸優れ、ことあるごとくに光を増す資質に、父帝の愛情はこの御子一身に注がれるが、その頃来朝していた高麗^{こま}の相人は、御子には帝王となるべき相はあるが、帝王となつては国が乱れる、かといって人臣で終わる人物ではないとなぞめいた予言を残す。帝は御子の立坊を願いながらも、政争の種となることを恐れて臣籍に降し、源姓を賜った。

帝は桐壺の更衣が忘れられず、悶々と月日を重ねたが、亡き更衣に生き写しの先帝の第四皇女・**藤壺**の女御を得て、ようやく心を慰める。亡き母を慕う源氏は藤壺になつき、藤壺もそれに応えた。世人は源氏と藤壺とを並べ称し、「光る君、輝く日の宮」とその美貌をたたえた。

源氏は十二歳で元服し、左大臣の娘・**葵の上**と結婚した。左大臣家の勢いは右大臣家を凌ぐ。

源氏は年長のこの妻にうら解けず、心密かに藤壺を慕ったが、もはや元服前のように対面できる機会はなかった。蔵人少将（のらの**頭中将**、**葵の上の兄**）は右大臣の**四（し）の君**と結婚させられる。源氏は亡き母更衣の里邸を手入れして、気ままな私邸とした。二乗院である。

※帝の妻の身分

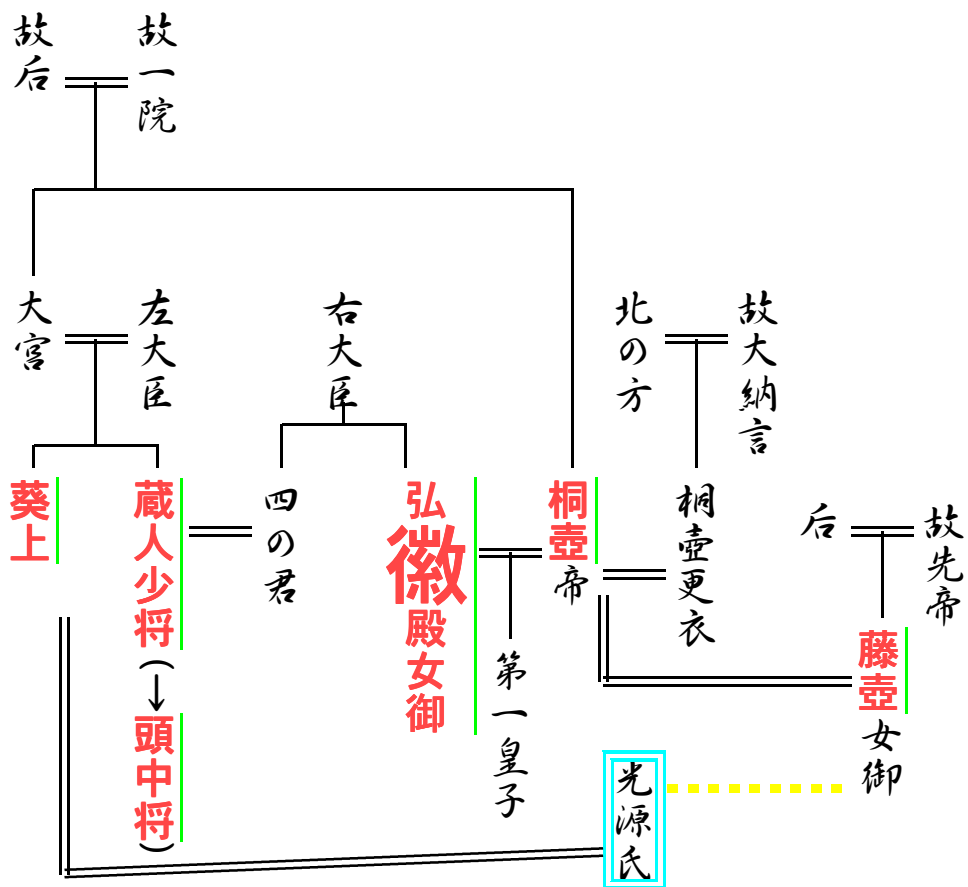
① 皇后（でも帝の愛はあまり注がれない）

② 中宮

③ 女御…父が**大納言**^{階級}以上

④ 更衣

奥方



光源氏十七歳、役職名近衛中将である。五月雨の降る退屈な夜、源氏が物忌みで宮中で宿直として

いるところへ頭中将が来合わせ、女性の話となった。頭中将は葵の上の兄で、源氏にも遠慮のない対抗意識を示す従兄である。左馬頭や藤式部丞も加わり、女性論議は佳境に入る。上中下三つの階層の女たちの特性を論じて、理想の妻の得難きを嘆く。嫉妬深い女、趣味だけの女、内気な女、あるいは才女など、各の経験談を交えての、いつ果てるともない長談義の中で、ほとんど聞き役に徹する源氏は、頭中将の経験談（夕顔の話）を聞き、自分に経験のない中の品の女に強い関心を覚えた。源氏は、そうした談笑の内にも、あくまでも奥ゆかしく申し分のない藤壺の面影をおもうのであった。

翌日、久しぶりに左大臣邸（葵の上の家）に赴くが、葵の上の態度は相変わらずである。源氏はこの妻とはどうもしつくりとかみ合わない。源氏は方違えにかこつけて中川の紀伊守きのかの別邸に向く。そこには紀伊守の父伊予介いよすけの若い後妻あき（読み…うつせみ）が来合わせ

ていた。夜が更けて、源氏は彼女の部屋に忍び、はからずも一夜のらぎりを結ぶ。源氏は始めて知った中の品の女性空蟬が忘れられない。空蟬の弟小君を仲介に再び中川を訪れるが、空蟬は我が身の程を思っ、二度と源氏を近づけようとはしなかった。源氏は女の拒否に戸惑った。

「空蟬」の巻

空蟬が光源氏を避ければ避けるほど、源氏は彼女を忘れることができない。源氏は小君を頼りに、三度中川の紀伊守の邸を訪れる。紀伊守が任国に下った夏の暮れ方、夕闇にまぎれて、空蟬が継娘軒端萩（のぎのき）と暮に興じる姿をかいま見た源氏は、その夜、空蟬の部屋に忍び入る。空蟬はいち早くそれと察して逃れ、源氏は心ならずも軒端萩とらざる羽目になる。源氏は空蟬の残していった小袷（↓蟬の抜け殻＝空蟬）と手にして、空しく二条院に帰った。空蟬も心乱れ苦しむのであった。

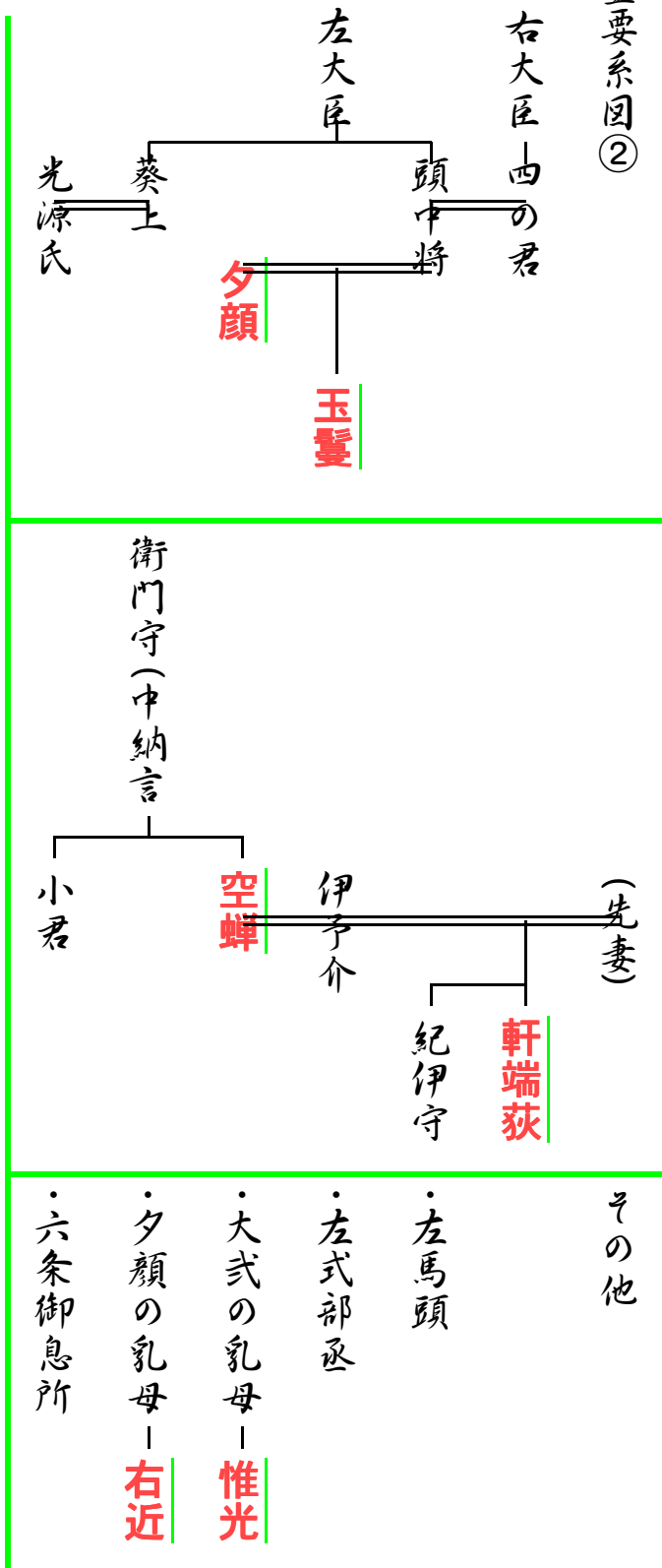
「夕顔」の巻

そのころ、光源氏は六条に住む奥ゆかしい貴婦人（「葵」の巻で六条御息所であることが分かる）のもとに忍び通っていた。ある夏の夕方、その邸への道すがら五条の大式乳母の病氣を見舞った折、白い夕顔の花が切懸（へり）に咲く隣家の女性から扇に記した歌を贈られた。筆跡のゆかしさから、源氏は乳母子惟光を介して隣家の女の素性を探り、やがて身分を秘したままその夕顔の宿の女の元へ通うようになる。その女もまた素性を明かそうとはしない。

八月の十五夜、源氏は月明かりの中、夕顔を伴って人気のない別院に赴く。荒涼とした別院での語らいの後、ふたりは物の怪に襲われる。夢かうつつか、ふたりの枕上には、妖しい女性の姿があった。冷え切った夕顔は物におびえて、やがて息絶えてしまった。源氏は一月近く病の床に臥すことになる。惟光の采配で、夕顔の亡骸は東山に密かに葬られたが、源氏も病をおして涙を野辺送りをするのであった。

夕顔、このはかない女は、あの雨夜の品定め、折、頭中將の語った「常夏(撫子)の女」であったこと、また、頭中將との間に一女(玉鬘)のあることが、後日、彼女の侍女右近の口から明かされることになる。源氏は心をこめて、夕顔の法要を行った。源氏は歌とともに小桂を返し、空蟬は夫伊予介に伴われて任国に下っていった。

重要系図②



光源氏(十七歳)は瘡(わらわやみ・周期的に発作の起るマラリア風の病氣)を病み、加持を受けるため北山の聖のもとに赴いた。老僧の祈祷の甲斐合って熱も上がらず、彼は山中の散策を楽しむ。北山の風光は源氏の絵心をそそり(のちに源氏が政界から身を引く伏線)、また供人のうわさに上った明石の入道の娘の誇り高さも、源氏の心を引きつけた。とある夕刻、小柴垣の庵室に、上品な尼と愛らしい十才ばかりの美少女と垣間見た。少女は、源氏が恋したってやまぬ藤壺女御に生き写しであった。少女は藤壺の実兄兵部卿宮の娘であった。心密かに思慕する人のゆかり(血縁)に惹かれた源氏は、祖母の尼君に将来の結婚を前提に、その少女の後見を申し出るが、祖母は少女の幼さゆえにためらう。加持を終えた源氏は、頭中将らが迎えに来て、聖たちの見送りを受けて下山するが、人々は源氏を仏の再来のように賛嘆する。若紫も子供心にも人並み優れた源氏の有様を好ましく思うのであった。

その頃藤壺女御は、病氣がみで里に下がっていた。女御を忘れ得ぬ源氏は思い詰めて、お付

きの女房にせがみ、やっとの思いで藤壺との逢瀬を果たしたが、まもなく藤壺は懷妊する。

藤壺はひとり罪におののいた（みな、天皇の子だと思っっているが、実は源氏の子）。源氏は夢占い己の思いもかけない将来と、その途中での受難を予言され、藤壺の懷妊と思い合わせて苦悩する。源氏の心を知りながら、藤壺は二度と源氏に会おうとはしなかった藤壺は宮中に帰り、身重になった藤壺への帝の愛情はこの上ないものとなった。

北山から帰郷した尼君と、源氏はめく上への道すがら訪れたが、弱り果てた尼君は若紫の将来を案じ、死後のことを源氏に託すのだった。尼君がなくなると、父兵部卿宮が自邸に引き取ろうとしたが、それを知った源氏は、継母の手に渡すことを危惧する乳母の躊躇に乗じて、その前夜に若紫と乳母を二条院に伴い入れてしまう。妻とも娘ともつかぬあどけない少女に、源氏は理想の女性藤壺の面影を求めて、その成長を楽しみにする。満たされぬ源氏の憂悶は、こうして藤壺にゆかりの少女によって慰められていくのだった。少女もようやく源氏になつき、周囲の批判と好奇の目をよそに、源氏の教育によって、美しくおおらかに成長していく。

夕顔の死後、光源氏は心の奥で夕顔に代わる女性を求めていた。乳母子の大輔の命婦から故常陸宮の忘れ形見の姫君の話を聞いたのはそうした折であった。荒れた邸に、琴だけを相手にいつそりと暮らすという姫君の人柄は夕顔を思わせる。興味をそそられた源氏は、春の朧夜、命婦の手引きで姫君の琴を聞いた。その折、頭中将に気づかれ、そのあけすけな競争心に煽られて、源氏は姫君に逢うことになる。期待に反して、姫君はまともな受け答えもできぬ引つ込み思案の無愛想者で、かたくなな無言で源氏を手こずらせた。

自然と足の遠のいていた姫君の元へ、大輔の命婦に促されて、源氏はようやく訪れるが、翌朝、雪明かりに、その醜い姿、わけても赤い鼻に仰天する。けれども、宮家の貧しさと彼女の誠実さと思い、姫君を援助しようと決心する。

二条院に帰れば、美しい若紫がいた。末摘花と全く対照的な可憐さに源氏の心は和み、二人で鼻の赤い女の絵を描いたりして戯れるのであった。

☆の上…貴族の**第一夫人**をさす。♂(.) 葵の上↓紫の上

もみじのが
「紅葉賀」…源氏十八・九歳

桐壺帝の**朱雀院**(先帝の御所)への行幸に先立ち、試楽が清涼殿の前庭で行われ、藤壺の見守る前で源氏は頭中将と青海波(波の寄せ返す様を袖の振りて表す優美な舞い)を舞って、人々の賛嘆の的となった。字、書けますか?**弘徽殿の女御**はその美しさを呪った。(藤壺が中宮に迎えられるのだが、

藤壺と源氏の母が生き写しであったことから)。二条院に迎え取った若紫はいよいよ源氏になつき、相変わらず雛遊びに熱中している。葵の上は源氏の浮気沙汰を不快に思い、夫婦仲は相変わらずしっくりしない。藤壺は皇子(これが実は源氏の子)を出産し、帝のお喜びはこの上ないが、源氏のうり二つの皇子を拝して、源氏と藤壺の悩み・恐れはは深まるばかりであった。源氏は正三位、参議に昇進する。

はなのえん
「花宴」(源氏二十歳)

南殿の桜の宴が催され、源氏の舞いや詩は人々の礼賛の的となり、一方、弘徽殿の女御は憎しみを募らせるばかりである。その夜の酔い心地に、藤壺との逢瀬を求めて近くをさまよう源氏は、たまたま戸口の開いていた弘徽殿の細殿で「朧月夜に似る物ぞなき」と口ずさんでくる女とらぎってしまう。女は相手を源氏と知って拒みもしない。女とは扇を交わして別れたが、翌日、**惟光**にその素性を探らせると、女は**右大臣**の娘(弘徽殿の女御の**妹**すなわら・**朧月夜の君**)で、東宮(後の朱雀帝)に入内することになっていた。危険な予感をほらんだ出合いであった。

「葵」(源氏二十二・三歳)

桐壺帝は譲位し、新帝**朱雀院**が即位、さらに藤壺腹の皇子が立坊し、源氏は近衛の大將に昇進している。葵の上は懐妊する。かねて源氏の冷たい態度に思い悩んでいた六条御息所は、娘が斎宮(読み**いつきのみや**またはさいごう)**(天皇の即位ごとに選ばれ、伊勢神宮に奉仕した未**

婚の内親王に選ばれたのを機に、娘に伴って伊勢への下向を思う。賀茂の祭りの禊ぎの日、行列に供奉（読み：**ぐぶ**）する源氏の姿を一目見たいと、六条御息所は姿をやつして出かけてきた。折から祭り見物に来ていた葵の上の一行は、一条大路の雑踏の中で、権勢を笠に着て他の車を押し退けさせたが、その中にあった御息所の車は、葵の上の従者によって列の後ろへと無残に押しやられた。

この争い以来、御息所は屈辱感に耐えられず、魂のあくがれさまよう心地に悩む。御息所は夢に、自分の肉体を離れ出た魂が葵の上を苦しめていると知る。一方、産褥の葵の上は執拗な物の怪に悩まされる。加持祈祷の末にようやく調伏された物の怪は、御息所の生き霊であった。物の怪は源氏と対面し、我が身の苦しさを訴える。葵の上は男の子（後の**夕霧**男だじよーつ）を出産後、その物の怪のために急逝した。源氏はいよいよ御息所を疎ましく思った。四十九日の喪に籠もった後、源氏は二条院に帰り、美しく成長した葵の上とらぎりを結んだのであった♪。

六条御息所は、源氏との仲を思い切って、伊勢への下向を決意する。出発も間近なある日、源氏は御息所を訪れた。その頃より病気がらであった桐壺院は、東宮と源氏を重ねるよう帝（朱雀院）に遺言して崩御された。権勢は新帝の外戚**右大臣**方に移る。源氏は**朧月夜の君**と弘徽殿の細殿で、危うい密会を続ける。藤壺は弘徽殿の**大后**の圧迫の強まる仲、東宮の将来と源氏の無思慮・無分別を懸念して、出家を決意する。藤壺の固い拒否に世をはかなんだ源氏は雲林院に籠もるが、紫上を思い、帰郷した。桐壺院の一周忌の法要を終えて、藤壺は出家・**落飾**（髪をそり落とすこと）した。

藤壺・源氏方の人々は昇進を阻まれ、**左大臣**は職を辞した。源氏や**三位中将**（かつての頭中将）は出仕せず、詩作のすさびに耽るのだった。源氏は里下がりしていた朧月夜の君と右大臣邸で忍び逢い、雷鳴の明け方、**右大臣**に現場を押さえられてしまう。右大臣は、源氏の傍若無人な振る舞いと、あまりに朝廷と我が一門をないがしろにするものであると激怒するが、娘に

累を及ぼさぬように穏便に計ろうとする。だが、源氏に対する憎悪と源氏で堪忍袋の緒が切れた弘徽殿の太后は、この機会に是が非でも源氏を葬り去らなければならぬと、策略を巡らすのであった（謀反の噂を流して、源氏を失脚させる）。

「花散里」（源氏二十五歳）

麗景殿（れいけいでん）の女御は、桐壺院の亡き後、源氏の援助を頼りにひっそりと暮らしていた。どららを向いても不如意なことが多い源氏は、五月雨の晴れ間に女御を訪れた。女御の邸には昔をしのばせる橘の花が香っていた。源氏は女御の妹三の君（三花散里）の部屋を訪れ、ここでも昔日を懐かしく語り合う。宮中で知り初めて以来の、親密な仲であった。

「須磨」（源氏二十六・七歳）

正解の情勢で日増しに不利になって行くなかで、陷穽にはまって謀反人の烙印を押されるよ

うな、状況が決定的になる前に、自ら退くことで矛盾を交わそうと考えた。既に官位は剥奪され、流罪の決定は目前に迫っていた。引退の地を須磨と定めたが、京に残す紫の上への愛着は強く深い。出立を前に、源氏は馴染みの人々と別れを惜しみ、僅かばかりの供人を連れて都を離れた。思えば、まことに理不尽な成り行きであった。

須磨の謫居(たつきよ)流罪にされた人が住む住まいは、在原行平が流謫(るたく)のわび住まいをした辺りにも近く、源氏は旅の悲しみを新たにするのであった。源氏には語り合う人もなく、都との音信だけが慰めであった。都の朧月夜は、朱雀帝の寵愛を受けるにつけ、源氏への執着を断ち切れない。須磨の秋はひとしおで、源氏は琴を弾き、絵を描き、和歌を吟じて無聊を慰めた。弘徽殿の太后の威勢を恐れて、都からの便りも途絶えがらとなる。

明石の入道は、源氏のうわさを聞き最愛の娘を奉りたいと思う。入道は源氏とは縁続きであった。須磨に春がめぐって、宰相中将(頭中将)が都から訪れ、源氏は遠来の友とゆかしい交歓の一日を過ごす。三月上巳の日、海辺で禊ぎをしていて暴風雨に襲われ、怪しい海竜王の夢に

脅かされた源氏は、この須磨の地を去りたいと思うようになった。この不思議な悪天候は、
間断なく何日も続いた。

「明石」(源氏二十七・八歳)

嵐はなおやまず、風雨を突いて都の紫上のもとから使いが届き、都でも朝政が滞るほどの天候異変であることを告げる。高潮と落雷に源氏は疲労困憊し、まどろんだ夢枕に亡き桐壺院が立って、住吉明神のお導きに従って須磨の浦を去れと告げる。その明け方、明石入道の一行が船を仕立てて源氏を迎えにくる。入道は、源氏を迎えるようにとの夢のお告げがあったことを語る。

須磨から**明石入道**の居館に移った源氏は、ようやく落ち着きを得た。入道が数寄を凝らした屋敷のたたずまいは、都にも類がなくなかった。入道は、源氏の関心をしきりと娘の**明石君**に向けようとし、源氏も入道の人柄は自らも琵琶・箏の琴で応じる。入道は娘を幼時より志高く

養育してきた経緯を語り、自分の娘に寄せる期待を源氏に伝えた。源氏も都からここまでやってきたのは、その娘に逢う宿縁であったのかと思って入道の志を入れ、明石君に消息を送る。明石君は田舎育ちに似ず、気位が高かった。入道の招きの言葉に応じて、月明かりの夜、惟光と共に源氏は明石君を訪れ、はからずも契ることになる。思いがけぬらざりにつけても紫上が思い起こされるのであった。

都では凶事が続き、帝も夢に故**桐壺**院の叱責を受けて以来、眼病に悩まされる。外祖父**右大****臣**は亡くなり、弘徽殿の太后も病みがらになった。年明けて朱雀院の退位の決意は固く、ついに次代の帝の後見として、源氏召還の宣旨が下った。源氏は、身ごもった明石君に琴を形見に残して帰京した。源氏は員外の**権大納言**に昇進し、帝の讓位も近い。源氏はしばらく私事を顧みる暇もなかった。

帰京後、源氏は亡父桐壺院追善の法要を営み、孝養（読みききょうよう）を尽くした。翌年、

実は源氏の子

冷泉院は無事即位し、源氏は内大臣となる。致仕（読みちじ）**一時的にやめていた大臣**の大

臣は攝政太政大臣として返り咲き、孫娘を入内させ、外戚となった。夕霧も**童殿上**する。藤

壺は**准太上天皇**（女院）の待遇を受ける。一方明石では女子が誕生する。その将来に立后の予

言があり、期するところの大きい源氏は、素性の卑しくない女を乳母として明石へ遣わした。

秋、源氏は須磨でたてた御願果^{ごがん}たしの位吉詣^{よしかよ}でを行う。同じく、参詣にきていた明石君とは

歌を贈答するが、逢うことはできなかった。明石君は、源氏の威勢に我が身の程を痛感し、

その日の参拝を控えた。

六条御息所は**斎宮**の退下（天皇が変わったから、斎宮も交替）により帰京し、病のため出家す

るが、やがて源氏に斎宮のことを託して死去した。源氏は斎宮を**養女**にして、冷泉院の後宮に

入れようとするが、朱雀院もご執心であった。源氏は藤壺女院にはかり、**朱雀院**の希望を退け、

斎宮を**冷泉院**の後宮に入内させた。

源氏が須磨・明石に侘住まいをしていた頃、都では嘆き暮らす女君たちが多かったが、中でも源氏の庇護を唯一の頼みとする**末摘花**は、たらまら窮乏の生活に戻らなければならなかった。もとより荒れていた邸はますます荒廃し、召使いたらも次々と去って狐狸の住処となるが、古風な気性の姫君は親の御影のとどまる邸を離れようとはせず、邸や調度を手放して日々の糧に替えることも承知しない。物語や古歌を慰みに、塵に埋もれ、ひたすら父母の威風を守っている。

彼女の母方の**叔母**は、今は**受領**の北の方であるが、かつてその一族に侮られていたことを恨み、昔の仕返しに姫君を我が娘たちの侍女にしようと考えている。折から、夫が太宰の第式に昇進したので、姫君にも筑紫への下向を進めるが、末摘花はもとより応じようとしていない。そのころ、源氏は帰京し、昔に勝る権勢の程が伝えられながら、末摘花を訪れることはないのです。

叔母はいっそう勢いづき、ついに姫君の乳母子の侍従を連れ去った。手足をもちれた末摘花は、なお源氏を信じてひとしお寂しい冬を過ごす。翌春、**花散里**を訪れる道すがら、木立に見覚えのある邸の前を通りがかり、源氏はようやく故常陸宮の姫君を思いだし、廃屋のごとき邸を訪れる。源氏は、末摘花の心の高さに感じ、心中に終生の庇護を誓う。邸の修理も行われ、離散していたかつての使用人たちも帰参し、邸内は活気を取り戻す。末摘花は後に二条院の東院に引き取られ、源氏の庇護を受けることになる。

閑屋（源氏二十九歳）

空蟬は桐壺院崩御の翌年、源氏二十四歳の年に、夫の伊予介が常陸介に任じられたのに従って、遙か東国に下向した。やがて、源氏失脚の噂が常陸まで伝わってきたが、空蟬は徒に胸を痛めるばかりであった。四年の任を終えて、常陸介一行は上京した。折から石山詣での源氏の一行と行き会い、かつて文使いの役に召し使われた**小君**が空蟬との間を往復し、空蟬は源氏の

変わらぬ心に、改めて我が身のつたない宿世すくせを悲しく思うのであった。その後の空蟬は、夫の死後尼となり、源氏の庇護のもとに静かな余生を送ることとなる。

絵合(源氏三十一歳)

入内した前の斎宮は梅壺うづの女御と呼ばれ、権中納言(昔の頭中將)の娘(弘徽殿いわゆる「弘徽殿の女御」ではないの女御)と冷泉帝の寵愛を争う。双方は所蔵している絵の優劣を競い、帝と藤壺の宮の前で行われた絵合わけは、最後に源氏の出品した須磨・明石の絵日記によって梅壺の女御方の勝ちとなる。

松風(源氏三十一歳)

源氏の二条院の東院が落成する。明石上あかしは姫君と上京するが、我が身の程を思って二条院には入らず、父明石の入道の大堰おおい(山莊)に住まう。源氏は、造営中の嵯峨野の御堂の用事にかこつけて大堰の明石上を訪れ、三歳になった姫君と始めて父娘の対面をした。幼い

姫君は予想以上のかわいらしさであった。予定を過ぎての帰京にご機嫌斜めの紫上と、源氏はなだめるのに苦勞する。明石上の姫君と養女として引き取ろうとする源氏の相談に、子供好きな紫上はようやく機嫌を直す。

薄雲（源氏三十一〜二歳）

雪に閉ざされた大堰の明石上はいよいよ無聊に苦しむが、姫君の将来を思って、源氏が紫上のもとに姫君を引き取ることに身を裂かれる思いで同意する。この年は多事の年で、源氏の舅（太政大臣）が亡くなり、天文には様々な凶兆が現れ、三月には藤壺の女院が亡くなる。厄年の三十七歳であった。冷泉帝は、古くから藤壺の宮家に仕える夜居よいの僧都の奏上によって、自らの出生の秘密（自分は帝の子ではなく、源氏の子であるということ）を知る。帝は心乱れ、源氏に譲位したい意向を漏らす。源氏は強く帝を諫め、太政大臣というすすめも固辞しうけない。源氏は自らの青春の過ぎ去ったことを感じ、閑雅な生活に入りたいと思うようになった。

朝顔（源氏三十二歳）

源氏の従妹にあたる朝顔の姫君は、父式部卿の宮（故桐壺院の弟）の薨去こうきょで喪に服することになった。斎院を退下し、父宮の旧邸桃園の宮に移った。そこには朝顔の姫君の叔母に当たる年老いた女五の宮も住んでおられるので、源氏はその見舞いにかこつけ桃園の宮を訪れ、朝顔の姫君に年来自分の胸中にくすぶり続けていた思いの丈（帝木）を訴えるが、朝顔の君は取り合おうとしない。姫君は、斎院時代に仏事に遠ざかっていた罪をすすぐべく、謹行一途の生活を志す。世上には源氏と朝顔の姫君との間が取りざたされ、紫上は自分の妻としての座が脅かされる深刻な不安に悩まされる。雪の一夜、月明かりを前に、源氏は紫上に過位の女君たちについて語り、感慨を深める。その世の夢に藤壺が現れ、紫上に秘密を漏らした源氏を恨む。

乙女（源氏三十三〜五歳）

源氏は相変わらず朝顔の君を思いきれず、折々の音信を続け、贈り物をしたりする。叔母の女五の宮も二人が結びつくことを望んでいるが、姫君の心は変わらず、源氏もそれ以上は押そうとしなかった。**夕霧**は十二歳となり、元服する。源氏は思うところあって六位にどめ、大学に学ばせるため、大宮の手元から二条院を迎えとり、博士に教育を託した。祖母大宮は不満である。夕霧はこの試練から逃れるべく、刻苦精励し、異例の速さで寮試に及第した。同じ頃、**梅壺**の女御が立后する。源氏は太政大臣に右大将(昔の**頭中將**)は内大臣となつた。内大臣は娘の**弘徽殿の女御**が梅壺の女御に越えられたことを残念に思いながら、大宮に預けた少女(**雲居雁(出)くもるのかり**)を東宮妃にという望みをかけていた。だが、女房たちの噂話から、雲居雁が幼なじみの**夕霧**と相思の仲であることを知る。立腹した内大臣は**大宮**を非難したあげく、娘を自宅に連れ戻してしまふ。夕霧は、六位の身を嘆くばかりであった。翌年の春、朱雀院の行幸があり、帝の御前の試みに詩才を顕して、進士に合格する。四季の庭を配した町々よりなる六条院の造営に取りかかり、八月に落成する。紫上を始め女君たち

が移り住み、六条院の極楽の如き生活が始まる。

玉鬘（源氏三十四〜五歳）

某の院で夕顔が急死して以来、源氏は彼女のことを忘れるときとてない。あの現場にいた乳母子の右近も、今は紫上に仕える身の上である。夕顔と頭中将（現内大臣）との間に生まれた姫君（玉鬘）は、事件の当時、西の京の乳母のもとにいたが、母親の行方を探しあぐねた乳母一家に伴われて筑紫に下っていた。姫君は、かの地で美しく成人し、二十歳になっていた。乳母の夫が没したため、乳母たちは上京できずにいたところに、その美貌と素性を伝え聞いて求婚者が殺到した。姫君を上京させて父の内大臣や母親に巡り会わせたいという思いから、強引に言い寄る求婚者たちをかわして、乳母は姫君を伴って京に上る。乳母子の豊後介が姫君を守って行をともにする。京に到着したものの、姫君の母、夕顔もう死んだという事を知らないに探すあてもなく、途方に暮れた一行は長谷寺の御利益を頼みに参詣の旅に出たが、その椿市の宿で、はしなくもあの右近に邂逅したの

であった。右近も姫君との邂逅を祈願して、しばしば初瀬詣でをしていたのであった。右近から夕顔の忘れ形見の姫君の無事を知った源氏は、自分の娘として六条院に引き取ることにし、夕霧同様、夏の町に住む花散里に世話を託した。

散るのは「橘」の花だから、夏

初音（源氏三十六歳）

正月を迎えて、世は春の彩りに浮き立った。なかでも、六条院の春の御殿の有様は、さながらこの世の極楽であった。年賀の客も一段落した元日の夕べ、源氏は紫上、明石の姫君、花散里、玉鬘と、装いを凝らして女性たらのもとを訪れる。翌日の臨時客には上達部、親王残らず六条院に参集したが、玉鬘の存在が念頭を離れない若者たらは、気もそぞろであった。

胡蝶（源氏三十六歳）

六条院の紫上の御殿では、春の庭が百花繚乱の景を繰り広げていた。参り集う君たちの中

には、いち早く玉鬘に思いを寄せる人が多く、源氏は期待通りの成り行きに満足する。源氏
の弟の**螢兵部卿宮**、**鬚黒大将**、（玉鬘と実の姉であるとも知らない）内大臣家の中将**柏木**な
どである。源氏はたびたび彼女の部屋に来ては、恋文の扱いや返書について教訓し、兵部卿
宮や右大将鬚黒について、婿としての人物評を加えたりするが、次第に玉鬘に対するただな
らぬ思いを深めていく。玉鬘に心奪われる源氏の胸中は、まず紫上に感づかれてしまう。

「**螢**」（源氏三十六歳）

玉鬘は、源氏の親らしからぬ懸想に困惑した。源氏は一方で、玉鬘に魅せられて言い寄る君
達の態度にも興味を覚える。初夏のある夜、源氏の招きで**兵部卿宮**が玉鬘のもとを訪れ、源氏
は玉鬘の部屋に螢を放つ。ほのかな螢の光に浮かび出た玉鬘の容姿に、兵部卿宮は心もそらに
思い焦がれるのであった。梅雨に入り、六条院の女君たちが絵物語のすさびに無聊を慰めてい
る中で、遠い西国の地に育った玉鬘は物語に熱中し、住吉の姫君の物語に我が身の数奇な来

し方を振り返ってみたりする。源氏は玉鬘を相手に物語論を展開する。一方、内大臣はこの年になって、昔夕顔に産ませた撫子が思い出され、玉鬘とそれ撫子とは知らず、夢占いをさせたりする。

「常夏」(源氏三十六歳)

夏の炎暑の頃、源氏が東の釣殿で夕霧を交えて涼んでいるところへ、内大臣家の君達が訪れる。夕霧と雲居の雁の結婚を許さない内大臣に對して含むところのある源氏は、最近内大臣家に迎えられた御落胤産ませた子供の近江の君のはしたなさを話題にし、痛烈な皮肉を言う。夕暮れ、源氏は玉鬘のもとに君達を伴う。実の姉弟とも知らぬ人々は胸をときめかす。玉鬘は源氏と内大臣の不仲を知って、実の親娘の対面の日も遠いことを思わずにはいられない。源氏は玉鬘に和琴の手ほどきをしなから、内大臣が当代の和琴の名手であることを語り、いずれ玉鬘を引き合わせたいと語る。一方、内大臣は美しい我が子の雲居の雁を見ては、やはり夕霧との結婚を

許そうかとも思うが、源氏がいつこうに折れてこないのが癪である。

「篝火」(源氏三十六歳)

実の娘(落胤)である近江の君を大げさに迎えておきながら、人柄が気に入らないと、たらまら女房に出してしまいう内大臣のやり方が、源氏には気に入らない。この内大臣の行動は玉鬘を迎えたときの源氏の慎重さとは大違いである。源氏の下心には困惑しながらも、玉鬘は源氏を慕うようになる。**夕霧**を訪ねて来て笛を吹いていた**柏木**と**弁少将**とが、源氏に誘われて西の対を訪れ、あらためて琴笛の合奏に興じた。玉鬘は名系のり園あえぬ兄弟照の姿に感慨もひとしおであったが、それとしらぬ柏木は、心のままに和琴を引くことができなかった。

「野分」(源氏三十六歳)

仲秋の八月、六条院の西南の町の、秋好む中宮(**梅壺の女御**)の御殿の庭園では、例年にな

く秋草の花の景觀が目と奪う美しさであった。折しも中宮も里下がりしていた夕刻から、激しい野分颪風が吹き荒れ、夜通し猛威を振るって、草花は一夜の間にしおれ伏した。その夕刻、風の見舞いに南(六条)の御殿を訪れた夕霧は、禁域としてたえて伺うことも許されなかった紫上の美しい姿を垣間見る。夕霧にその姿は、春の曙の霞の間に咲く桜と望まれた。その夜を祖母大宮の三条の宮に過ぎした夕霧は、風の音にまんじりともせず、紫上の美しい面影を追ひ求めるのであった。翌朝、南の御殿に立ち返った夕霧は、野分に荒れた庭に目とやりながら、聞くともなしに源氏と紫上の仲むつまじいやりとりを聞く。夕霧は女君たちを見舞う源氏のお供をするが、なかでも玉鬘の美しさは、夕映えに露を帯びた八重山吹の花さながらであった。明石の姫君のもとにたちよった夕霧は、雲居の雁への文を書くが、そこで垣間見た明石の姫君は、藤の花の美しさと思わせた。

冬、大原野の行幸があり、左右大臣以下供奉する盛儀に、源氏は加わらなかった。玉鬘は人

々に交じって見物し、念願の父 玉鬘は夕顔と頭中將の娘だったねっ 内 大 臣の姿に目を止め、求婚者の兵部卿宮、鬚黒の大

將の姿も目に付いたが、冷泉帝の比類なき美しさに、かねて源氏の勧める尚 ないしのかみ（天皇の世話） 侍（女性

の官職）就任のことにも心が動くのだった。源氏は玉鬘の入内を勧めようとし、その前に裳着

（もぎ）の儀式をあげようと、親子の対面もかねて、内大臣に腰結の役を依頼する。しかし、内

大臣は大宮の病気を口実に断ってくる（自分が外戚になるために雲居雁と夕霧の結婚を許さな

い内大臣は、源氏を面白く思っていない）。源氏は三条に大宮を見舞い、玉鬘のこと（出生の真

実）をうら明ける。驚いた大宮は内大臣に消息を送り、二人の和解が成立する。玉鬘の素性が

明らかになるにつれ、懸想人たらや、内大臣の君達の心中は複雑であった。年あけて、玉鬘の

裳着の当日、六条院の女君たらや大宮からお祝いが届けられる。内大臣は源氏の厚意に謝しつ

つ、裳の腰を結った。近江君は、玉鬘を羨み、一層人々の嘲弄の的となっている。

病篤かった大宮は亡くなる。玉鬘は尚侍に任じられたが、さまざまに悩みは深い。入内して、秋好む中宮や弘徽殿の女御という義理ある人と帝寵を競うようなことになりはすまいか。源氏は前にもまして恋慕の情を露わにし、周囲には彼女のにわかな幸運を妬む人も多い。夕霧は噂話にかこつけて、玉鬘に対する源氏の本心を追及する。内大臣は、源氏の底意を見抜いているとつげる。源氏は夕霧の追及を受けて、潔白を証明せねばならない気持ちに追い込まれる。帝の意向どおり玉鬘の出仕が決まり、柏木は父内大臣の使いとして玉鬘を訪れる。源氏を憚る玉鬘はあくまで慎み深く、他人行儀の怠りを柏木は憎んだ。求婚者たちは焦慮し、次々と恋文が届けられる。

玉鬘が、事もあるうにあの無骨な**鬚黒の大將**の手中に歸したという、意外な事実が伝えられる。源氏もこの既成の事実を認めざるを得ない。意に染まぬ事態に玉鬘はうら沈み、改めて、源氏や兵部卿の優雅さを慕わしく思うのだった。玉鬘は尚侍の職務を、鬚黒と通わせたまま、六条院で執り行う。鬚黒の北の方は式部卿宮の姫君だが、鬚黒はその北の方の自邸に玉鬘を迎えようともくろむが、ある雪の夜、玉鬘のもとに出向こうとする鬚黒の支度を手伝っているうら、北の方は突然錯乱して薰き物の火取りの灰を浴びせかけた。破局は決定的であった。恐れをなした鬚黒は、自邸に寄りつかず、激怒した式部卿宮は北の方を連れ戻してしまう。この事件は、いよいよ玉鬘を憂鬱にした。年あけて、宮中に出仕した玉鬘は、華やかに時めいた。冷泉帝は事志と違えて恨み言をおおせになる。兵部卿宮も密かに消息を寄せ、鬚黒は不安を抑えきれず、宮中から強引に玉鬘を自邸に退出させてしまった。

明石の姫君の裳着とそれに続く入内の準備に、源氏はこの上なく心を配った。中宮の御殿

で明石の姫君の裳着の儀式が行われた。中宮の腰結役は例がなく、その光榮に源氏は姫君の将来の榮達を強く期するのだった。源氏は嫡男夕霧の身が固まらないのを氣にかけて縁談を持ち出したり、結婚について自分の体験をもとに細々と教訓する。もとよりまじめな夕霧は、他の女に心に移すつもりはないが、雲居の雁は、夕霧の縁談の噂などを耳にして、夕霧からの文にもうらみの歌を返すのだった。

ふじのうらば
「藤裏葉」

故大宮の三回忌が催され、夕霧と雲居の雁は、やっと心のわだかまりを解いた。内大臣は夕霧を自邸の藤の花の宴に招く。長い年月を経て結ばれた夕霧と雲居の雁、この若い理想的な二人の結婚は、人々の嫉妬を買うほどである。明石の姫君の入内に、紫上は北の方として付き添って参内するが、しかし、生母の心を思いやり、後見の役を委ねるべく、宮中を退出する。紫

上は明石の上と対面し二人は互いの相手のすぐれた人柄に接し、うら解ける。四十歳を迎える源氏のために、世は挙げて御賀の準備に奔走するなかに、帝は源氏を「帝王でもなければ、臣下でもない」准太上天皇（じゅんだいじょうてんのう。だいじょうてんのう上皇）に准じる存在）に勧められた。六条院に行幸があり、その盛儀に光源氏の栄華はきわまった。

※ここで、源氏は上皇に准じる存在となったので、以下「**院**」と呼ばれる。

「若菜上」

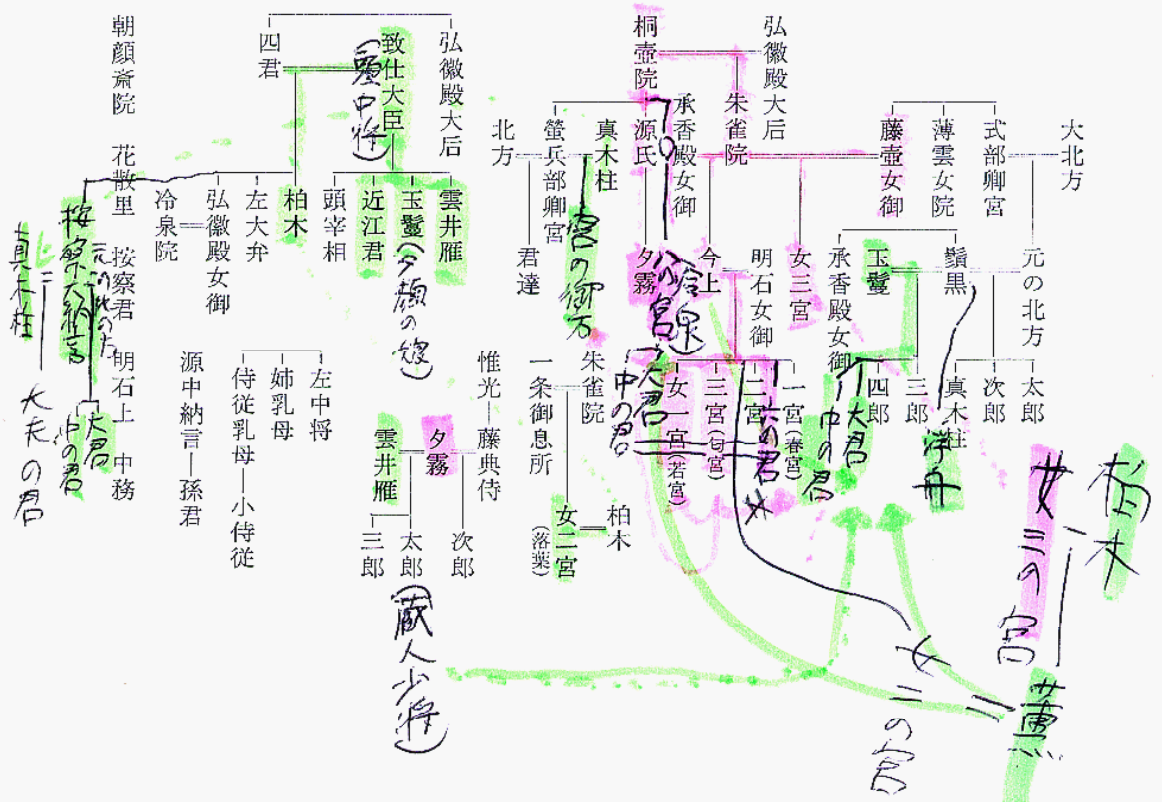
六条院の行幸の後、**朱雀院**は病重く、出家を決意するが、愛娘の**女三の宮**の生来を案じ、婿選びに心を砕く。多くの候補者の中で、適任者は源氏以外にいないと朱雀院は考えるに至る。朱雀院の出家姿を見ると、源氏は女三の宮の後事を引き受けざるを得なかった。源氏も、女三の宮が亡き藤壺の宮の娘だよね？であるところから、心動くものがないわけではなかった。やがて、

女三の宮の裳着が済み、朱雀院は出家する。源氏は朱雀院を見舞い、女三の宮の後見を承諾した。源氏と紫上の間には微妙な空気が流れた。年あけて、女三の宮が六条院に移ってきたが、源氏はその幼さに失望するとともに、凜として振る舞う紫上に改めて強い愛着を覚えた。翌春、**明石**女御は待望の皇子を出産した。明石の入道はこれを聞き、年来の宿願の次第を長い手紙にしたためて娘に送ったあと、山奥深く跡をたった。六条院で行われた蹴鞠に加わった**柏木**は、夕闇迫る寢殿の御簾のはずれに、かねてより心を寄せる女三の宮の姿を垣間見る。女三の宮の不用意な幼さに夕霧は呆れるが、その女三の宮をみて魂を抜かれたようになっている柏木の様子にも、強い危惧を感じた（あとで柏木にも、源氏と同じ事件が起こることの暗示）。

「若菜下」

四年の歳月が流れ、冷泉帝が退位、東宮が即位して、外戚の鬚黒の大將が右大臣に昇って政

治の実権を握り、明石の女御腹の第一皇子は東宮となった。明年は、朱雀院があたかも五十になられるので、源氏は女三の宮主催の御賀（**おんが**）に若菜を献じたいと計画する。御賀は二月に予定されるが、紫上はにわかに発病して重体に陥った。紫上は二条院にうつされ、源氏はつきっきりの介抱に明け暮れる。柏木衛門督は中納言に進む。柏木は女三の宮の代わり、**姉の女二の宮**（落葉の宮）を妻に迎えたが、なお女三の宮への執着を断ら切れないでいた。柏木は源氏の不在に乗じて、宮の乳母子の手引きで遂に女三の宮に逢った。女三の宮は不義の子を身ごもる（夕顔のときとおなじことが起こってしまった！以前の「暗示」にあったとおり）。紫上は六条御寝所の死霊のため一時絶息する。源氏は女三の宮の懐妊を知って不信を抱くが、六条院に宮を見舞った源氏は、柏木の恋文を発見し、一切を悟った。柏木も女三の宮も秘密の露見したことを知って、怖れおののく。柏木の若さをたしなめた源氏の皮肉に、柏木は致命的な打撃を受け、恐怖と絶望のあまり病に臥す身となる。



柏木の病は回復の兆しもなく新しい年を迎えた。罪におののく柏木は一途に死を願うが、志の遂げられなかった自分の半生があとを顧みられ、女三の宮への執着も断ら切れない。女三の宮の乳母子を通じて、死を覚悟した苦しい胸中を女三の宮に訴えたが、これが最後の便りとなった。女三の宮は、その夕刻から産気づいて、翌朝男子（薫）を出産するが、衰弱と源氏への恐れから来る心労は、女三の宮に出家を決意させ、夜陰密かに宮を見舞った父朱雀院にすがって、出家を遂げる。女三の宮にとりついてた六条御寝所の死霊の仕業であった。女三の宮の出家を聞いた柏木は、重態に陥る。見舞いに訪れた親友の夕霧に、それとなく事情をほのめかし、源氏へのとりなしと正室落葉の宮に対する配慮を依頼して、悲劇に終わった恋に殉ずるように、その若い命を閉じた。源氏は薫の成長を見、女三の宮の尼姿を見、孫の誕生も知らぬ致仕（**ちじ**）読み：公職を退いた人のこと。ここではもと**頭中將**）の大臣夫妻の嘆きを思うにつけ、柏木の不運に涙を禁じ得ないのであった。柏木の遺言に忘えるべく、夕霧は落葉の宮の住む一

糸の宮にしばしば弔問の足を運ぶが、落葉の宮の地味な性格に心惹かれ、同情の思いはいつしかほのかな恋心を訴えるまでになる。

「横笛」(よく出るらしい)

柏木の一周忌を、源氏も夕霧も心を込めて弔う。朱雀院では、春の西山の御寺(みでら)^{読み}近くに住む出るタケノコを送られると、幼い薫がよらよら這い出してきて、生えかけた歯をタケノコに当てたりする。源氏はその無心な姿に、苦い思い出も忘れそうになる。秋になって、夕霧は一条の宮を訪れた。落葉の宮の母**一条の御寝所**には、柏木遺愛の横笛を贈り物にする。いつそりとした一条の宮に心を残しながら帰ってきた山上の邸では、北の方雲居の雁が不機嫌である。その夜の夢に柏木が現れ、笛の相伝には別の人を考えていたことをつける。夕霧は柏木の供養を営み、笛のことを相談がてらに、六条院の父の元に赴くと、そこでは柏木に似た薫が明石の女御の皇子たちと無心に遊んでいる。源氏は夕霧の話を聞き、笛は自分が預かるわけが

あると言う。やがて薫に伝えようとのつもりである。夕霧は柏木の遺言をほのめかし探りを入れるが、源氏は思い当たることはないと、夕霧の口を封じるのであった。

「鈴虫」

蓮の花の盛りに、女三の宮の持仏開眼供養が営まれた。やがて新築される念誦堂のためのもので、細々とした仏具一切を源氏は詔あづから（調）えた。思いもかけず俗世の縁を絶つことになった女三の宮に對し、せめてその生活は豊かで安泰であるようにと、万金の配慮をする。秋になって、源氏は女三の宮の御殿庭を野の風情に造り変え、鈴虫を放った。折から、兵部卿宮や夕霧が訪れて、たらまら鈴虫の宴となった。

「夕霧」

一条の御寢所は、物の怪加持のため、小野の山荘に移る。彼女の見舞いで小野を訪れた夕霧

は、夕暮れの深い霧に紛れて落葉の宮に忍んで思いを訴えるが、落葉の宮は聞き入れず、ふたりは何事もない一夜をとにもする。二人のことを物の怪加持の律師の話によって知った母御寢所は、苦慮の末、娘を夕霧に託す旨の歌を送る。ところが、この手紙は雲居の雁に奪われて、夕霧の返事が遅れ、母御寢所は心労のあまり絶命する。落葉の宮はますますかたくなに心を閉ざすが、夕霧は強引に結婚を策して、落葉の宮を一条の宮に連れ戻す。宮は塗籠に閉じこもって夕霧を避けるが、翌日夕霧はついに塗籠に入り、表向き二人の結婚が成り立たたかのように見せかける。宮は依然として心は解けないものの、成り行きにあきらめざるを得なかった。噂を耳にして、紫上は、女というものの宿命に（男の恣意に振り回される）胸を痛めた。

「御法（みのり）」（よく出るらしい）

紫上は数年前の大病の後、ずっと病がらの日々を送っており、年月とともに弱っていくので、

源氏の嘆きはこの上もない。後世（読み **ごせ**：極楽往生）のため、紫上はかねて念願の出家を望

むが、病身の紫上と離れるのは忍び難く、源氏はどうしても許さない。夏の炎暑で病勢はさらに進んだ。明石の中宮は見舞いのため、二条院に退出する。紫上は、中宮と三の宮（**句宮**

（**に**おうのみや））にそれぞれさりげなく遺言する。折から風が激しく吹き出した秋の夕べ、

庭の萩の露にはかない自分の命を見る思いで、紫上は歌を詠む。源氏と明石の君が唱和する。その直後、紫上は中宮に手を取られて露の命を終えた。源氏は悲しみのあまり、夕霧が近づいて紫上の死顔をのぞき込むのを制止することさえ忘れていた。夕霧は、その比類のない美しさに目をくらむ思いがした。

「幻」

新年、春の光にも、春を愛した人への新たな悲しみに、源氏は喪に籠もったまま拝賀の人々に会おうともしない。紫上に親しく仕えた女房たちと故人の思い出話にふけり、女君たちを訪れ

ることもない。季節の移り変わるにつけ、源氏は自然の営みさえ疎ましく出家の志は深ま
ていく。源氏は、年を越して出家するつもりで、紫上の文を焼く。年末の仏名会

(ぶつみようえ)^{読み}に、源氏は初めて人々の前に姿を現した。追儼^{節分(新年前日)}(ついな)にはしゃぐ句

宮の無邪気さが、わずかな^{ほだ}絆しとすらなくもない。大晦日、年の終わるとともに、源氏は自
らの生涯も終わったことを悟るのであった。

「雲隠」

※内容は無い。巻名は後の人がつけたもの。源氏の死を暗示しているだけで、本文は伝わって
いない。

「白宮」

光源氏の亡きあと、わずかに、今上帝^{天皇}の三の宮^の(白う兵部卿^子)と女三^{柏木}の宮腹^のの若君^子(董る中将)

とが美男の誉れが高かった。夕霧は、美人の聞こえが高い**六の君**をこの二人の君達のいずれかに縁組みさせたいと考えているが、白宮にはその気がない。董は冷泉院と秋好む中宮とに目をかけられ、元服も冷泉院で行われ、中將となった。母女三の宮は子の董と親のように頼りに思い、今上帝の宮達も慕っており董は身の休まる暇もないと思う。董は自らの出生に関する疑念に苦しみ、悩み多き青年に育っている。董には生まれつき体に芳香があり、白宮はそれと張り合って董物にこり、着衣には香を焚きしめている。この二人を娘の婿にと望む貴族が多いが、白宮は冷泉院の**女一の宮**に関心を寄せており、董は出離の志があって結婚は念頭にない。

「紅梅」

柏木の弟**按察大納言**は、柏木は長男なんだから当たり前だ故致仕の大臣（かつての頭中將）の次男で、北の方は亡くなって、今は故螢兵部卿宮の北の方であった**真木柱**を北の方にしている。按察大納言には、もとの北の方

とのあいだに生まれた姫君(大君・中の君)と、真木柱との間に生まれた子息(大夫の君)とがある。真木柱は、故螢兵部卿宮との間に生まれた姫君(宮の御方)を連れている。これらの姫君に求婚する貴族は何人もいて、帝や東宮からもその意向が伝えられた。大納言は、大君と東宮妃として宮中に上げた。大納言は、中の君を是非とも白宮にと思い、紅梅に歌を添えて白宮に送ったりもするが、白宮は気乗りがしない。白宮が関心を寄せているのは宮の御方の方であった。母真木柱は、良縁と思わぬではないが、夫の期するところを知っており、また白宮は好色で宇治の八の宮の姫君にもご執心であるとの噂も耳にしている。

「竹河」

故鬚黒太政大臣の未亡人玉鬘が、上の人とは別。大君・中の君の身の振り方に頭を悩ましている。大君には、今上帝からの御所望があり、また冷泉院もかつての玉鬘を忘れかねて、是非大君をお望みである。右大臣夕霧の子、**蔵人の少将**も大君にいたく思いを寄せるが、何分にもまだ若輩である。

大君は冷泉院に上がり、やがて姫宮と出産する。冷泉院に殊遇される董は、大君にも近く侍し、秘かに思慕の念を抱いている。一方、中の君は、母玉鬘から尚侍の職を譲られて入内する。大君は続いて男宮を生むが、周囲の嫉視が煩わしく、心休まらぬ日々である。玉鬘は今さらながら悔いるほかなかった。隣り合う按察大納言家の繁栄ぶりを見るにつけ、思うことが多い。

以下「宇治十帖」

「橋姫」

源氏の弟宮（八の宮）は、零落して今は宇治に住んでいる。八の宮の落魄はくは、昔、源氏が須磨に流謫の際、弘徽殿の太后が、東宮を廢して代わりに八の宮の立場を画策したため、源氏の帰京後はかえって世間から見捨てられる運命を甘受するほかなかった。北の方との間に美しい姉妹（大君・中の君）をもうけるが、北の方は産褥で亡くなった。八の宮は仏門に帰依しながらも、

姫君達を思って出家もかなわずにいる。宇治山の阿闍梨を通して八の宮の噂は冷泉院に伝わり、側に侍る**薫**はそれを聞いた八の宮の人柄と生活に心ひかれ、しばしば宇治へ通うようになった。たまたま八の宮が寺に籠もった留守に訪れた薫は、琴と琵琶を合奏する二人の姫君と垣間見た。薫は、姉の大君との落ら着いた気品と素直な優しさに、強く心惹かれるのであった。薫の前に、柏木の乳母子であった**弁**と名乗る老いた女房が現れ、柏木の形見の品と遺言を薫に伝えたいと言う。薫は周囲を憚って、再訪を約束して帰京する。薫は、思いがけぬ美女の発見を白宮に誇り、白宮はそのことへの好奇心を大いにそそられている。八の宮は法の友として薫を頼りに思い、死後を託したいと考えている。薫は弁から自らの出生にまつわる昔語りを聞き、文反古の袋を受け取った。薫は、亡き実父柏木の筆跡に衝撃を受けるが、無心に経を読む母女三の宮の尼姿がいたわしく、やり場のない苦しみとひとり胸中に収めるのだった。

白宮は、初瀬詣での帰途、宇治の夕霧の別邸に立ち寄り、音楽に興ずる。かねて董から聞いていた八の宮の姫君達への好奇心からである。対岸には八の宮邸がある。翌朝、董の元へ八の宮からの文がとどく。董は貴公子達を伴って対岸へ舟を渡す。そこへ白宮から大君あての歌がとどく。董は、死を予感した八の宮から姫君達への後事を託される。宮は、姫君達に「なまじいにこの山里を離れようと思ってはならぬ。」と戒め、秋の念仏に宇治山の阿闍梨の寺に籠もったまま、山寺で亡くなった。喪が明け、白宮からたびたび恋文がとどくが、父宮の遺言と思いついたにすぎぬ姫君達は、この高貴な人の求愛にも応じる気配はない。年の暮れに宇治に大君を訪れた董は、中の君と白宮の結婚を勧め、大君には自らの思いを告白するが大君は取り合わない。白宮は周囲から夕霧の六の君との縁談を進められるが、もっぱら宇治の姫君との仲立ちを董にせがむのだった。

董 ↓大君

白宮 ↓中の君

亡き八の宮の一周忌に近い頃、董は宇治を訪れた。董は大君の側近く近づくものの、喪服にやつれた大君のいたわしさに身を退いた。心細い宮家の生活に動揺する女房達は皆董を頼みとし、結婚を望まない大君と意志は貫けそうにない。大君は、中の君を代わりに董にめとらせようと考える。いよいよ思いを募らせた董は、思いあまって大君の邸屋に忍び入った。大君は妹をひとり残して逃れ、董は中の君と空しく語り明かすこととなった。董は、大君のたくらみを無にすべく闇の紛れに、かねてご執心の白宮を中の君の寢所に導く。大君はそれと知って、董の賢しらを恨みつつも、中の君のために白宮を迎えようとする。宮は、帝や后の警告も聞き入れず宇治に通い、京に引き取ることを考える。だが、白宮は将来東宮たるべき人であり、れっきとした妻を迎えねばならない。白宮の宇治通いは早くも途絶えがらとなった。白宮が宇治の

紅葉狩りをするのに、明石の中宮が差し向けた人々の仰々しさに、白宮は中の君のもとに立ち寄ることを断念せざるを得なかった。目の前で都の貴公子達から無視された大君の落胆と無念はこの上ない。加えて、夕霧の右大臣の六の君と白宮の婚儀が整ったとの噂は、大君とすっかり打らのめした。大君は父宮の遺言に背いた自分を責め、絶望を深めて行くばかりであった。大君が止むとき、董は万事を抛なげうって駆けつけた。大君は、妹中の君を案じつつ、枕頭の董に看取られて他界した。二人は遂に結ばれることはなかったのであった。喪が明け、漸く董は帰京した。白宮は、中の君を京に引き取ることをつけてきた。

「早蕨(さわらび)」

年明けて春になったが、大君に先立たれた中の君の悲しみは尽きない。中の君の面瘦せした風情は大君に似ていた。女房達は、中の君が董と縁のなかったことを残念に思う。喪が明け、中の君は二条院に待らかねる白宮に迎えられて、新しい生活に入った。白宮と六の君の結婚を

もくろんでいた夕霧は、思わぬ事態に不快を隠しきれない。やむなく董に意向を打診するが、董にその意志はない。董は、二条院に初めて中の君を訪れた。中の君に白宮の愛情は細やかだが、それを喜びつつも董は「取り返すものにもかなや」と思ったりする。

今上帝は董との賭事に負け、**女二の宮**を董に許すとの内意を託された。噂を聞いた夕霧は董をあきらめ、六の君の婿に**匂宮**をと思い定めた。中の君は京に出てきたことを悔やみ、しきりに宇治の山住みで終わる決意を語っていた亡き姉君の生き方を思うのであった。翌年、白宮は六の君のもとに通うようになる。董は、中の君の不安と悲しみを慰めようと、たびたび二条院を訪れる。ある夜、思いを抑えかねて中の君の袖を捉えるが、懐妊中の腹帯に気付いて危うく自制した。邸に帰った白宮は、中の君の衣装に董の君の芳香が移っていることを怪しんで中の君を責めた。その後訪れた董が、宇治に御堂を建てて大君の像をまつりたいと語るのです、中の

君は、大君に生き写しの異母姉妹の存在をうら明ける。**浮舟**である。年改まって、董は権大納言に昇進して右大將を兼任する。一方、中の君は男子を出産して、その立場も安定する。女二の宮の蒙着の儀が執り行われ、その夜から董は宮のもとに通うようになる。宇治を訪れた董は、たまたま初瀬詣での帰途山莊に泊まり合わせた浮舟を垣間見て、大君に生き写しのその容姿にいたく心を打たれる。

「東屋」

董は、亡き大君に似るという浮舟に関心はありながら、世間体を憚っていた。浮舟の母も、弁の尼から董の意向を伝えられ、嬉しく思うものの、あまりの身分の違いにためらっている。浮舟の継父常陸介は、長い東国の受領暮らしの間に財を蓄え、それを目当ての求婚者は多い。浮舟の母は、高貴な血筋を受けながら、肩身の狭い思いでいる浮舟が不憫でならず、立派な縁組みをさせてやりたいと思う。母は董との縁に心残りはあるものの、やはり身分相応の縁をと

思つて、**左近少将**を婿に選んだ。結婚の日も近くなつて、少将は浮舟が常陸介の実子でないことを知り、まだ幼い実の娘の方に急遽乗り換えた。母は、浮舟を同じ家におくのに思ひず、中の君のもとに預ける。二条院で白宮と董の姿を垣間見て、母親の心は揺らぐ。たまたま伺候していた、ものの数にも入らぬ従者達の中に、いっこうに風采のあがない少将の姿を見だし、軽侮の念さえ起こす。母は、浮舟の結婚にはやはり高い理想を貫くべきだと、つくづく思うのだった。**白宮**は邸内に思いがけぬ人を見つけて、中の君の妹とも知らず言い寄つたことから、母君は浮舟を三条の小家に隠した。宇治の弁の尼からこのことを聞いた董は浮舟の隠れ家を訪れ、翌朝には浮舟を車で宇治に連れ戻した。

「浮舟」

白宮は、二条院で会った女のこと忘れられず、その素性も知らぬ女への恋心をつのらせていた。中の君は沈黙を守っていた。**薫**は、浮舟を愛しく思いながらも、北の方女二の宮を憚つ

て、宇治を訪れることも間違になっている。年あけて正月、中の君のもとに浮舟から新年の挨拶がと届けられた。その文から、白宮は女の居所を探り当ててしまう。董方の事情に詳しい家臣を通じて、董が宇治に女を囲っていることも知った。わが目で確かめようと宇治を訪れた白宮は、格子のすき間から浮舟を見届ける。董を装って宇治を訪れた白宮を、乳母子の右近はそれと気付かずに浮舟の寢所に招き入れてしまった。人違いと気付いて浮舟は泣き出すが、白宮は声も立てさせず、強引に浮舟と契った。翌朝、右近は間違いを知ったが、すでに取り返しはつかない。周囲を気遣う右近の腐心をよそに、董とは対照的に情熱的で一途な白宮に惹かれて行く。二月になって漸く宇治を訪れた物思わしげな浮舟の様子に愛しさを増し、京に迎えようと言う。秘密を抱く浮舟は、ただ煩悶するばかりである。白宮は、董が浮舟を思ふ心の深さを知って、たまらず宇治へ急いだ。雪にも構わず訪れた白宮の志の深さに、女たちは感激する。対岸の小家に浮舟を連れだし、夢のように甘い二日間を過ごした白宮は、董に對抗して浮舟を京に迎えようとする。浮舟は二人の男の間に立って苦悩する。ことにも

あろうに、董と白宮の文使いが宇治の邸で鉢合わせし、事態を知って董は、浮舟に不倫をな
じる歌を送る。邸の周辺も嚴重に警戒されるようになり、訪れた白宮も浮舟に会わずに帰ら
なければならなかった。思い悩んで臥す浮舟の傍らで、右近は二人の男の間で身をほろぼし
た姉の話をする。右近は邸の警護についても語り、白宮に危害が及ぶかも知れない見通しを
述べる。聞くともなしに聞く浮舟の惑乱はつのも、董と白宮のいずれを選んでも不幸の起こ
ることに思い至った浮舟は思い詰め、遂に入水を決意した。

「蜻蛉」

浮舟失踪の翌朝、宇治の邸で人々は為す術も知らぬ有様だった。京の母君からは胸騒ぎがす
ると再度の使いが来る。乳母子の右近は昨夜浮舟が残した母君への手紙をあけてみて、入水の
覚悟を知った。白宮からも使いが来る。やがて母君自身もやってきて、悲しみ惑うことは一通
りではない。人々は入水の噂が世間に広がるのを怖れて、亡骸もないまま、その夜葬送を済ま

せてしまう。折から董は石山参籠中であつたが、葬送の翌日、弔問の使いを送り粗略な葬儀を答めた。宇治という土地の忌まわしさと、自分の運のつたなさを、董は改めて感じていた。白宮はその後悲嘆のあまり病床に伏し、董はそれを見舞つてさりげなく皮肉を言う。宇治を訪れた董は、右近から浮舟が病死ではなく入水したことを知らされ、母親の悲しみを深く察し、遺族の世話を約束した。董は、浮舟の七十七日の法要を盛大に営んだ。常陸介は、今や浮舟がわが子とは比較にならぬやんごとなき生まれだったことも知った。

「手習」

横川(読み…**よかわ**)の僧都という高德の僧がいた。その母尼と妹尼の初瀬詣での帰途、母尼が発病し、僧都も下山して加持祈祷をし、一行は宇治の院に泊まる。その院の裏庭にある大木の根本に、物の怪に気取られたとおぼしき意識不明の若い女が見いだされ、そのまま母尼と妹尼との住む小野の山荘に伴われる。それは入水した浮舟だった。四月五月と二ヶ月もの間重態が

続くが、妹尼のたつての願いで下山した僧都の加持によって漸く意識を取り戻す。妹尼は、浮舟が初瀬の初瀬の観音から預かった亡き娘の身代わりであると思ふが、浮舟は出家の願いを口にするだけで、かたくなに身元を明かそうとしない。秋になって、漸く浮舟は僅かに手習いにその鬱々とした心情を託すのみである。妹尼が初瀬詣で留守の間たまたま立ち寄りつた僧都に浮舟は懇願して漸く出家を遂げ、ひたすら朽ち木のように人に知られぬ生涯を送ろうとする。浮舟の消息は、横川の僧都の口から明石中宮の耳に入り、やがて董にも知らされる。董は思い悩みながらも、とにかく僧都にあって事情を確かめようとする。

「夢浮橋」

横川に僧都を訪れた董は、僧都自身の口から詳しい事情を聞き出し、夢かとの思いに、僧都の前も憚らずに落涙した。浮舟を早まって出家させたことに後悔の念を禁じ得ない僧都は、董の深い愛執の思いを目の当たりにして困惑する。浮舟との対面を画す董は、僧都に下山して案

内するよう懇願するが、僧都は婉曲にこれを断り、浮舟への手紙を浮舟の弟、小君に託しただけだった。その夜、横川から下山する董一行のあわただしい松明の光は、山荘の浮舟達からも遙かに望まれた。頃は、ちょうど遣り水に螢が明滅する五月の頃だった。翌日、事情を明かされた小君達が使いに立つ。僧都の手紙は浮舟に還俗を勧めるものだった。妹尼は懸命に小君と浮舟との間を取りなすが、浮舟は小君にも対面しようとせず、董からの手紙も、人達いかも知れないと言って受け取らなかった。誰にも知らないで終わりたいという浮舟の決意は固い。浮舟の心をはかりかねる董の胸中は複雑で、誰か別の男に匿われているのではないかと、あらぬ疑いを萌すのだった。